中学生の社会的行動についての研究 (96)

— 全体的自己価値と向社会的行動の因果関係の検討 —

○山本ちか¹・氏家達夫²・二宮克美³・五十嵐敦⁴・井上裕光⁵

(¹名古屋文理大学短期大学部・²名古屋大学・³愛知学院大学・⁴福島大学・⁵千葉県立保健医療大学)

キーワード：中学生，全体的自己価値，向社会的行動

Developmental study on Japanese adolescents' mental health and social adjustment (96)

YAMAMOTO Chika¹, UJIE Tatsuo², NINOMIYA Katsumi³, IGARASHI Atsushi⁴, INOUE Hiromitsu⁵

(¹ College of Nagoya Bunri Univ., ² Nagoya Univ., ³ Aichi Gakuin Univ., ⁴ Fukushima Univ., ⁵ Chiba Prefectural Univ. of Health Science)

Key words: junior high-school students, global self-worth, prosocial behavior

目 的

山本らの一連の研究では、「今の自分が好きである」、「時々自分のことがいやになる」など自分自身全体についての評価を「全体的自己価値」とし、中学生の全体的自己価値はどのように変化するか、全体的自己価値の変化に影響を与えているのはどのような要因かを検討している。研究(89)では、中学生の向社会的行動が全体的自己価値とどのように関連しているのかを横断的に検討した結果、1年生では向社会的行動を多く行っているほど全体的自己価値が高く、その傾向は男子において顕著であった(山本ら, 2013)。研究(94)では、向社会的行動と全体的自己価値の関連を、縦断データを用いて検討した結果、男子については中2時点の向社会的行動が中3時点の全体的自己価値と相関が見られた(山本ら, 2014)。そこで本研究では、交差遅延効果モデルを用いて、全体的自己価値と向社会的行動の経年変化を検討し、全体的自己価値と向社会的行動の因果関係を検討することを目的とする。

方 法

1. 調査実施時期と調査協力者 調査は愛知県内の中学生と福島県内の中学生に実施した。調査実施時期は、中学1年：2002年9月中旬、中学2年：2003年9月下旬、中学3年：2004年9月下旬であった。今回の分析は、3時点すべての向社会的行動と全体的自己価値の項目に回答のあった愛知県の中学生347名(男子157名、女子190名)について行った。

2. 調査内容 ①向社会的行動(6項目)：「困っている人を助けた」、「忘れ物をした人に自分の物を貸してあげた」など向社会的行動について、この3ヶ月にどれくらいしたかを4段階評定(何度もあった～一度もなかった)でたずねた。②全体的自己価値(5項目)：「自分のことが好きである」など自分をどのように評価しているかを6段階評定でたずねた。

結 果

1. 全体的自己価値と向社会的行動の平均値及び標準偏差

全体的自己価値は、肯定的に評価しているほど高得点になるように合計点を算出した。向社会的行動は多く行動を行っているほど高得点になるよう合計点を算出した(Table1)。

Table1 時点別・性別の平均値と標準偏差(SD)

	男子			女子		
	中1	中2	中3	中1	中2	中3
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
向社会的行動	2.06 (0.73)	1.89 (0.69)	1.87 (0.73)	2.22 (0.70)	2.19 (0.69)	2.07 (0.62)
全体的自己価値	3.50 (1.03)	3.50 (0.98)	3.38 (1.08)	3.05 (1.04)	2.82 (1.01)	2.81 (1.03)

2. 全体的自己価値と向社会的行動の因果関係の検討

交差遅延効果モデルを用いて(Fig.1), 全体的自己価値と向社会的行動の因果関係を検討した。分析は男女別に行った。

(1) 男子 モデルの推定結果をTable2に示した。適合度の指標は、GFI=.975, AGFI=.933, CFI=.986であり、十分な値であった。まず、全体的自己価値の経年変化については、中1時点が中2時点に影響し、中2時点が中3時点に影響していた。向社会的行動の経年変化についても、中1時点が中2

点に影響し、中2時点が中3時点に影響していた。さらに中1時点が中3時点にも影響していた。全体的自己価値が向社会的行動へ及ぼす影響については、有意なパスは見られなかった。向社会的行動が全体的自己価値へ及ぼす影響については、中学2年時点での向社会的行動が中3時点の全体的自己価値に影響していた。

(2) 女子 モデルの推定結果をTable3に示した。適合度の指標は、GFI=.993, AGFI=.984, CFI=1.000であり十分な値であった。全体的自己価値の経年変化については、中1時点が中2時点に影響し、中2時点が中3時点に影響していた。さらに中1時点が中3時点にも影響していた。向社会的行動も、全体的自己価値と同様の結果であった。全体的自己価値から向社会的行動への影響も、向社会的行動から全体的自己価値への影響も、いずれも有意なパスはみられなかった。

Table2 モデルの推定結果(男子)

	β
全体的自己価値：中1 → 全体的自己価値：中2	.516 ***
全体的自己価値：中2 → 全体的自己価値：中3	.609 ***
向社会的行動：中1 → 向社会的行動：中2	.589 ***
向社会的行動：中2 → 向社会的行動：中3	.528 ***
向社会的行動：中1 → 向社会的行動：中3	.207 **
向社会的行動：中2 → 全体的自己価値：中3	.141 *

β =標準化係数 ***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

Table3 モデルの推定結果(女子)

	β
全体的自己価値：中1 → 全体的自己価値：中2	.570 ***
全体的自己価値：中2 → 全体的自己価値：中3	.507 ***
全体的自己価値：中1 → 全体的自己価値：中3	.222 ***
向社会的行動：中1 → 向社会的行動：中2	.505 ***
向社会的行動：中2 → 向社会的行動：中3	.458 ***
向社会的行動：中1 → 向社会的行動：中3	.198 **

考 察

本研究の目的は、全体的自己価値と向社会的行動の経年変化と、全体的自己価値と向社会的行動の因果関係を検討することであった。その結果、全体的自己価値、向社会的行動いずれも、男女とも中1時点が中2に時点に影響し、中2時点が中3時点に影響するという経年変化がみられた。全体的自己価値と向社会的行動の因果関係では、女子では関連がまったくみられなかった。男子については、中2時点の向社会的行動が中3時点での全体的自己価値に影響しており、向社会的行動を行うことによって自分自身に自信を持ち、全体的自己価値が高くなる可能性が示唆された。

引用文献

山本・氏家・二宮・五十嵐・井上 2013 中学生の社会的行動についての研究(89)→向社会的行動と全体的自己価値の関連—日本教育心理学会第55回総会,
山本・氏家・二宮・五十嵐・井上 2014 中学生の社会的行動についての研究(94)→縦断データを用いた向社会的行動と全体的自己価値の関連の検討—日本発達心理学会第25回大会発表論文集, 643.